



試
し

ハラスメント社長のお仕置きタイム

読
み

「何回も何回も同じミス繰り返かえしやがって！

ここは学校じゃねえんだぞ！

いや、小学生だって、ここまで物覚えや聞き分けがワルくないわ！
もう幼稚園からやり直してこい！」

チワワよろしく縮みあがってふるふるする大島を罵倒しつくすと、扉
を開き叩きつけ社長室に。

ソファに仰向けに倒れ、湯気たつような額に手を当て、ため息を吐く。

今の時代「なんとハラスメントのひどい横暴社長！」と非難されそうだが、俺は八つ当たりしていなければ、加虐性愛者でもない。

俺だって心穏やかに、部下たちと和やかに談笑をしたがいが、さっき云ったとおり、初歩的なミスを懲りずにやらかさされては「逆に俺をイジメているのか!？」と逆上せざるをえない。

友人の経営者なんか「今どきのつては、云いたくないけどさー」と愚痴れば「そりゃあ、おまえが有能でデキすぎるから」と苦笑されるし。

ネクタイと靴下だけ身につけ、すっぽんぽん。
万歳した手を縛られ、乳首が立った胸を張り、足を広げて、股間が丸見え。

丸見えというからに、観客あり。
とり囲むのは会社の部下たちで、彼らはきっちりスーツをまとっているのに、俺だけが裸。

「はう、あ、ば、かあ・・・見る、なあ！」

足を閉じようとしても、手でホールドされ、びくともせず、おまけに

左右から胸の突起を舐められ、尻の入り口に指をねじこまれている。

左にいるのは、小川。

仕事は丁寧だが、時間をかけすぎ、細かいところまで突きつめるのが難。

「時間制限があるの分かっていないのか!?」「おおまかに適度にしていい仕事もあるんだぞ!」とどれだけ怒声を浴びせても、ちまちまじりじりと事をすすめたもので。

そのクセが愛撫にも。



サウナで夢うつに

「はあ、う、あ、ああ、あん・・・！」

尻に固く太いのを飲みこみながら、磨りガラスに体の前面をこすりつけ、呼吸を乱しながら喘ぐ。

縦長の二畳くらいのサウナ室。

熱中症になったように意識を朦朧とさせつつ、どうしてこうなったのだろうと、思う。

きっかけは、会社の同僚の坂田がサウナに興味を示したので、サウナ

ズキの俺が、ここに連れてきたこと。

サウナブームによって、こうした一人でも使える個室もあり。
初心者の坂田には、ちようどよかろうと。

社員旅行でいった温泉で、すでに裸のつきあい済み。
お互いの視線を気にせず、早早すっぽんぽんになり、サウナ用のパン
ツをはいて、いざ。

「ちよ・・・！」と制止する間もなく、指で突起をつつきながら胸を揉み、パンツの裾から手をいれ、際どいところをなでなで。俺の背中に胸をつけて、首や頬に荒く熱い息をふうふう。

「ば、か、あ、あう・・・！やめ、ろ、って、ん、はあ、く、あ、あ、あ、だめ・・・！」

ただでさえサウナの熱に当てられているというに、身の内から燃やすように興奮しては、心臓が破裂しそう。

サウナ上級者の俺が、目を回し脱力する一方で、どうしてか、サウナ

初心者の坂田は、熱を燃料にするように、がつがつと体にむしやぶりついてきて。

たしかに、テクニクを誇っただけあり、滑らかな手つきにあんあん身悶えてしかたなく。

なにより、背中にくっつく坂田の上半身、湿って熱い肌が摩擦し、かすかに水音がするのが悩ましげで。

股に湯たんぽを挟む男



俺は幼いころから冷え性で、夏以外は寝るときに湯たんぽが欠かせなかった。

電気毛布や電気アンカなど、ほかにも暖をとる方法はあったが、湯たんぽがイチバン具合がよく、スキだったのだ。

じんわりと骨の芯まで染みるようなヌクモリ。寝ているうちに、体温が上昇し、それに合わせるように徐々にヌルクなっていくのもいい。

それに足だけでなく、体の冷えたそれぞれの箇所に対応することができ

るし。

お腹とか、腰とか、胸とか、手とか、なかでも俺のオキニイリは太ももで挟むこと。

全身が温まりやすいし、パズルのピースがはまったかのようなジャスフィット感が。

まあ、股間の膨らみに当たって、ちよつと、うずうずするというものあるけど。

「あ、ああ、ば、かあ・・・！ふあ、ああ、あ、あ、やあ、あん、ああん！」

快い湯たんぽのヌクモリでもって、性的な快感をもたらされては、酔ったように目眩がし、全身が痺れる。

布団に隠れている股間はまだしも、濡れた乳首がＴシャツに透けて見えるし。

一見、愛撫する相手がいないから、まるで、お乳を漏らしているようなさまで、頬が赤らみ、股間も似た状態かと思えば、恥ずかしすぎる。

羞恥に身を震わせ「は、もう、だめえ・・・！」とイキそうになったところ、尻への侵入が追打ち。

舌のようながら、実際のそれより自由自在に蠢き、じわじわとヌクモリで身の内をほぐしていく。



ミニスカナースに

お注射を

学園祭でクラスは女装男装喫茶をやることになり、くじ引きで当たり（俺にしたらハズレ）を獲得した俺はミニスカのナースに扮することに。

が、目が細く眉毛が太く、骨ばった輪郭をした、キングオブ男顔といつていい俺だ。

化粧をするほど、女らしさから遠ざかり「客が怯えて逃げる！」と大

不評だったに、素顔でナース服を着ることに。

まあ結局「オカマでさえない、百二十パーセント男じゃん」と男子連中は萎えていたが。

そのくせ、いざ学園祭がはじまり、俺が接客をすると、セクハラしまくり。

「顔を見なければ、チョーエロい！」らしい。

ぬちゆぬちゆ、くちゆくちゆと上からも下からも聞こえて、耳がヨガるように、ぞくぞくしてやまない。

「このままイカされるのか!？」と快感に震えつつ、戦々恐々としたものを、口からバイブが抜かれて。

「さあ、つぎはどこを消毒しようかな？」と顎から首、肩、胸に滑らせて、浮き彫りになった突起へ。

「あ、ああ、やあ、やあん、だ、めえ、あ、あ、あ、く、くあ、ああ、ああう！」

自分の唾液をなすりつけられるだけでなく、スイッチオンされて、急に振動が。

さつきまで口を開けっ放しだったこともあり、加えて不意打ちをされては、とても声が抑えられず。

「いいんだよ、ここは防音が効いているから。

ほら、淫乱ミニスカナースの声をもっと聞かせてよ」

